臨床医の視点を忘れずにユニバーサル・ヘルス・カバレッジ達成を目指します

さの　まさひろ
佐野　正浩

国際医療協力局
連携協力部・連携推進課
医師

★略　歴

2009年 愛知医科大学医学部卒業
2009年 杏林大学医学部付属病院 (初期研修医)
2011年 亀田総合病院 (総合内科後期研修医)
2014年 亀田京橋クリニック (総合内科医師)
2015年 亀田森の里病院 (総合内科医師)
2016年 長崎大学病院 (感染症内科医師)
2018年 マヒドン大学熱帯医学大学院修了
2019年 東京都立豊島病院 (感染症内科医師)
2020年 東京都立豊島病院 (感染症内科医長)
2023年 シドニー大学公衆衛生大学院修了
2023年 国際医療協力局入局

★資格

日本内科学会 認定医 / 日本エイズ学会 認定医 / 日本内科学会 総合内科専門医
日本感染症学会 感染症専門医 / 厚生労働省 臨床研修指導医
愛知医科大学医学部衛生学講座 非常勤講師

★現在の主な担当業務

・WHO関連業務窓口
・海外拠点事務所ラオス担当
・ベトナム北部における脳卒中センターの遠隔診療を活用した医療体制強化事業
・各種研究・研修等

佐野さんが、医療職・国際協力を目指したきっかけを教えて下さい。

実家は漁業関係の仕事をしていたので子供の頃の夢は魚屋さんでしたが、学年が上がるにつれて天文に関する仕事か医療系の仕事をしてみたいと思うようになりました。中学校の卒業文集の将来の夢は医師になると書いていたと思います。ただ勉強ができるわけでもなかったので、3浪して何とか医学部に進学しました。

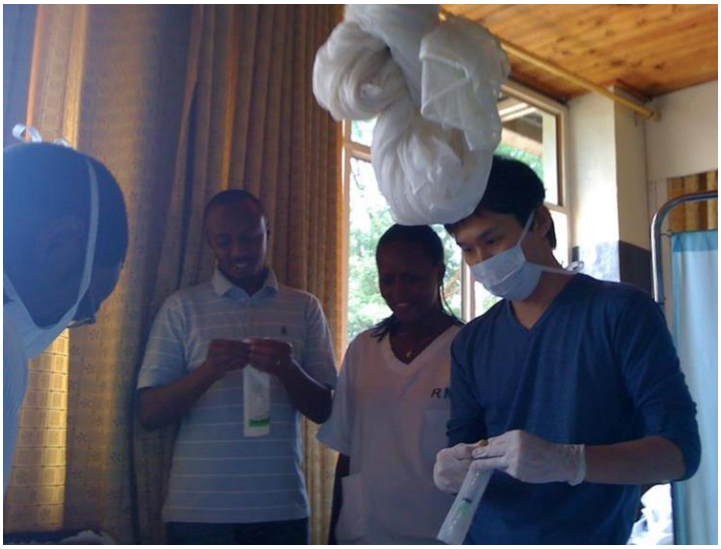
医学部2年時に大学近くで愛知万博が開催されガーナ館を訪れた時に黄熱病の研究者として野口英世の事が特集されていました。長年抱いていた直接自分の目でアフリカを見てみたいという思いが高まり寄生虫関連のJICAプロジェクト(ガーナ共和国)や、NGOのプライマリヘルスケアの草の根事業(ザンビア共和国)に学生スタディーツアーという形で参加をしました。深呼吸をした時の日本とは違う空気感や、無数の輝く星の中から静かに現れる流れ星に感動し、いつかは途上国で暮らす方にとって何か役に立つ事をしてみたいと思うようになりました。

ガーナ大学医学部にある野口英世博士像の前で

国際医療協力局に入職する前はどのようなキャリアを積まれていたんですか。

初期研修修了後は、トレーニングに定評のあった亀田総合病院総合内科に進み、毎日が合宿のような日々を過ごしました。

途上国の現地医師に臨床指導する機会もいただき(ルワンダ共和国)、具体的な将来プランを立て始めていましたが、後期研修3年目に母親が肺癌ステージⅣの診断となりました。入院の際は亀田本院、外来抗癌剤治療は東京駅近くにある亀田京橋クリニックで受けており、ちょうど内科外来立ち上げの時期であったので、後期研修修了後はここでの勤務を開始しました。外来受診日は自分の診察室の隣の、腫瘍内科診察室で家族として病状説明を受けていました。クリニック所属では専門医の受験資格を得られなかった為、神奈川県にある亀田森の里病院にも籍を置き地域医療に従事していました。はじめて3次医療施設以外の病院での勤務でしたが、大病院で働くだけでは分からなかった問題点や困難を身をもって知りました。



ルワンダ共和国で現地医師への臨床指導（関節液穿刺中）

その後、臨床感染症学を専門としながら、タイのマヒドン大学(Diploma in Tropical Medicine and Hygiene)とオーストラリアのシドニー大学(Master of Global Health)に留学をしました。

シドニーを選んだ理由は、妻と娘の強い結託によりハワイか、シンガポールもしくはオーストラリアにしか付いていきませんと言われた事が一番大きな理由ですが、人生で一度くらい家族と一緒に海外で暮らしてみたかったので安全に過ごせる事を第一優先にシドニー大学に決めました。授業の予習と課題だけでなく、自分と子供の学費や高い生活費に最も苦労したかもしれません。長期休暇では一人帰国し、発熱外来や救急当直のアルバイトを連日行いました。18時まで関東の僻地で働き22時の羽田発シドニー行きにギリギリで飛び乗る事を繰り返しました。それでも、動物園にいるようなカラフルな鳥の鳴き声で起き、日本よりも青い空の下での生活は貴重な経験でした。付いてきてくれた家族には感謝しかありません。

マヒドン大学時代の同期とタイ- ラオス国境付近にて

シドニー大学にて

家族で初めての海外長期滞在（シドニーの海辺にて）

国際医療協力局に入職するきっかけ、理由はなんだったのですか。

18年前ガーナにはじめて行った際、美しい自然に感動すると同時に、日本では普通に感じる生活が途上国では普通でない事を知り、この分野に興味を持ちました。しかし、最近は途上国での医療に関わりたいと思う理由は、途上国での経験だけからではなく日本での日常生活が大きく影響しており、少しずつ変化している気がします。

例えば、毎日出勤する際、6歳の娘には何時に帰ってくるのかを聞かれるのがルーティーンとなり、自宅で仕事をしようと机に向かってしまえば「私と遊ぶのと仕事をするのどっちが大事なの？」と眉間に皺を寄せながら真剣な眼差しで言われると、子供達が平和で安全に暮らせる為に何かをしていこうと思うようになりました。

そう願うのは日本であっても途上国であっても変わりません。途上国で暮らす人達の為に自分の臨床経験を生かす事ができるかもしれない点と、安定した収入を確保し自分の家族も養う事ができる2つの点を就職先候補の必須条件とし、国際医療協力局にたどり着きました。

今後はどのような展望、夢をお持ちですか。

まだ具体的に展望を言える余裕はありませんというのが正直なところです。色々な仕事のお話をいただけるので、経験を積みながら自分がより貢献できる箇所を見つけていきたいと思います。国際保健の仕事をする一方で、どの位先になるかは分かりませんが、いつかはこれまで自分や家族を安全に育ててくれた場所に臨床医として戻るつもりです。不安や孤独を感じながらも懸命に生きている人の為に直接的に時間を使いたいと思います。それが医師を志した頃の初心であり、今も変わらない私の役目だと勝手に思っています。

最後に、これから国際医療協力の世界を目指そうとしている人にメッセージをお願いします。

当局にご関心がある方がいらっしゃいましたら是非見学にいらしてください、お待ちしております！！

ありがとうございました。